中学生における心理主義的な知識と行動

- 加藤隆雄（南山大学）
- 小針 誠（同志社女子大学）
中澤 渉（東京大学）
- 木村祐子（お茶の水女子大学大学院）

1. 研究の目的と方法

(1) 研究目的

1990年代以降の日本の不安定な社会経済状況を背景にして、「心」に対する人々の関心は高まっていった。学校現場へのカウンセリングの導入、いじめや虐待、犯罪事件や災害等の被害者・関係者への「心のケア」、うつ病へのメンタルクリニックを初めとして、心理ゲームや多重人格や異常心理への関心のような「サブカル」的なものに至るまで、心への関心の高まりは1990年代日本の重大な社会現象であった。

しかし、「心」は、単なる関心対象であるにとどまらず、社会の構成原理へと往々にして転化する。たとえば、いじめや不登校、少年非行をカウンセリングによって解決していこうとする傾向は、逸脱行動が個々人の心から発生する想定を前提するものであった。そして、心への過剰な注目は、学校制度やシステム自体の矛盾から目をそらすという機能を果たすことにもなっている。個々人の心が社会現象の構成原理となることで、「社会」という審級が見失われていくことになっているのではないか。

こうした社会現象は、(著者により表現は違うが)「心理主義化」などとして、個人化、医療化、自己の変貌、感情労働と「心」の商品化、教育と労働市場との関係および労働市場の構造変化、新保守主義、サブカルチャーなど、政治・経済・人間関係・教育・文化といった領域との関連で論じられてきた。しかし、「心理主義化」の定義はこれまで十分になされてはこなかった。これは、「心理主義化」の核心はどのようなものであるのか、誰がどれだけどのような点で変化しているのかについて、社会批評的な推測にとどまっていたことが大きい。

われわれは、これまで実証的な把握が十分だったとはいえないこの現象について、中学生を対象とした質問紙調査を実施することで、「心理主義化」のありようを見定めたいと考え、次項のような質問紙調査を実施した。

(2) 研究方法

- 対象・・・中学2年生。中学生を調査対象としたのは、第一に、1990年代に生まれた世代であり、「心理主義化」を自明のものとして生まれ育っているゆえにその特徴が他の世代よりも顕著に見られることが期待できること、第二に「心理主義化」がすでに固定的な意識・行動パターンとなっていない段階と考えられること、第三に思春期の問題に直面しており、「心理主義的」な意識・行動との対峙を迫られる可能性の高い発達段階に現在あると考えられること、の三点である。
- 地域・・・大都市地域と非都市地域が存在しているP県。産業集積率の高い地域であり、首都圏などへの進学を考えなくても地元で就職できる可能性は高い。それゆえ、地元指向はきわめて高く、下に挙げる「心理主義化」の特徴が増幅されている可能性がある。
- サンプルとその抽出・・・地域的な特徴を考慮して、大都市地域と中都市地域、町村からそれぞれサンプルを抽出。また、学校文化も考慮して公立と私立からサンプルを抽出した。8有効回答数1094票(回収率95%)。
- 調査方法・・・集合自記式。
- 調査時期・・・2006年12月～2007年1月。
- 調査項目
 - ・学校での勉強・部活動、進路希望、塾通学
 - ・新聞、読書、インターネット

- ・友人・親との関係、携帯電話の使用
- ・「心理主義的」な意識
- ・心理学的な知識
- ・悩みと相談相手
- ・将来の希望
- ・人間関係への不安
- ・本人の身体的心理的状态
- ・親の教育態度

○倫理的配慮

個人が特定されないような質問紙調査であるのはもちろんのことだが、回収の際に回答がおもて面に現れないような配慮をした。また、リストカットに関する項目は削除または任意の回答にした。母親がいない生徒に対して、質問文を工夫するなどの配慮をした。全体を通じ、調査対象校の責任者に対して、口頭で調査の目的とその利用について説明し、了解を得た。また、生徒に対して過度の心理的な負担を与えないよう、年間スケジュールのなかで無理なく実施できるよう配慮して実施した。

2. 心理主義的意識

本節では、中学生にみられる心理主義的な意識と関心のあり方を概観し、それらがどのような状態で存在し、どのような要因と関連しているかを述べていきたい。

(1) 心理主義的意識の諸相

「心理主義化」にかかわると思われる12の項目を設定し、それに対して5件法(とても/やや/どちらともいえない/あまり/まったく)で回答を得た。これに因子分析を施した結果が表1である。4つの因子が抽出されたが、項目と因子の関係から判断し、それぞれ「コントロール」「未知のものへの態度」「自己責任」「空想没入」と名づけた。特に第一因子は、自己と社会に対する制御が共鳴関係にあることを示している。「心理主義化」の現象がこれで尽くされているとはいえないし、項目が変われば因子構造も変化すると考えられるが、ここでは特に複数項目で因子負荷量が大きい「コントロール」「未知のものへの態度」「自己責任」を、「心理主義化」の実質により近い構成要素として考えることにする。

【表1】「心理主義的」項目の因子分析

(主因子法・ヴァリマックス回転)

	コントロール	未知への態度	自己責任	空想没入
いまの社会について関心がある	.681	-.194	.129	-.049
「自分たちの力で社会を変えられる」	.652	-.022	.080	.083
日本という国に愛着を感じる	.573	.231	.095	-.217
「学校にカウンセラー(心の相談員)がいると、いろいろな悩みが解決できる」	.490	.204	-.033	.187
脳を鍛えるトレーニングをすれば、学校の勉強がよくわかるようになる	.426	.263	-.116	.318
嫌なことがあっても、カットならなくて、気持ちをおさえることができる	.400	-.294	-.027	.070
占いの結果を信じる	.159	.762	-.054	.061
「性格は血液型によって決まる」	-.079	.720	.166	.028
「子どもが不登校になる原因は子ども自身の心の弱さにある」	-.031	-.164	.757	.132
「フリーターになる人は根気・やる気のない人である」	.087	.204	.695	-.126
「勉強すれば将来は豊かな生活ができる」	.397	.194	.417	-.001
マンガやアニメの登場人物になりきって、さまざまな空想をすることがある	.046	.030	.045	.916

(2) 心理主義的意識の規定要因

調査にあたって独立変数として想定した項目は以下のようなものである。

a₀. 学校差(公立/私立、所在地)

a₁. 地域差(大都市・中都市・町村)

さらに、これらを融合させて

a. (擬似一)階層差(三分類)

という変数も作成した。他には

b. ジェンダー

c. 学力(勉強の理解度の自己評定)

d. 悩み

e. メディア(携帯電話・パソコン)接触

f. 親の教育態度

という変数を用いて分析を行った。ここではt検定の結果を表2に掲げておく。

【表2】「心理主義的」項目のグループ間比較

(検定; ** p<.001; * p<.005でそれぞれ有意)

	地域三分類	階層三分類
いまの社会について関心がある	*	
「自分たちの力で社会を変えられる」		
日本という国に愛着を感じる	**	**
「学校にカウンセラー(心の相談員)がいると、いろいろな悩みが解決できる」	*	**
脳を鍛えるトレーニングをすれば、学校の勉強がよくわかるようになる	*	
嫌なことがあっても、カッとならないで、気持ちをおさえることができる		
占いの結果を信じる	*	*
「性格は血液型によって決まる」	**	*
「子どもが不登校になる原因は子ども自身の心の弱さにある」		
「フリーターになる人は根気・やる気のない人である」	*	*
「勉強すれば将来は豊かな生活ができる」		
マンガやアニメの登場人物になりきって、さまざまな空想をすることがある		

ここから、「未知のものへの態度」の項目群が地域・階層の変数と強くかかわっていることがわかる。「コントロール」項目でも有意な差を生じたものがあるが、学力(勉強の理解度の自己評定)の変数に対しては、

** いまの社会について関心がある

「自分たちの力で社会を変えられる」

「勉強すれば将来は豊かな生活ができる」

嫌なことがあっても、カッとならないで、気持ちをおさえることができる

となったことを考慮すると、心理主義化と学業達成とがある程度相反するものである可能性がある。(他変数による分析については省略。)

3. 友人関係

(1) 問題

本節では、中学生の友人関係の特徴と心理主義化との関わりを属性(性別・地域・学校)から明らかにすることを目的としている。

これまで、心理主義化された社会のなかで、どのような対人関係が形成されているのかについては、ビジネスの領域を対象に研究がされてきた(森 2000)。森によれば、現代の対人関係は、いかに合理的に、効率よく、自己の感情をコントロールするかが鍵となる。たとえば、『困った人との付き合い方』、『EQ』などの自助マニュアル本が流行し、対人関係をより円滑にするために心理学的な知識が多用されている。森は、近年のこうした傾向を批判的にとらえ、「現代人の自己コントロール能力が低下しているように見えるのは、その能力に対する期待のレベルが高まった結果にすぎない(森 2002, 22 頁)」と指摘している。そして、対人関係の技法は、事後的ではなく予防的であることが目指されている。「傷つけてしまった相手にどのように対応するか」ではなく、「相手を傷つけないような接し方をする」ことが求められる。このように、心理主義化における対人関係のあり方は、高度な自己コントロールが予防的に求められ、合理性や効率性が重視されていることがわかる。

しかしながら、これまで心理主義化がどのような人々において浸透・進行しやすいのかについてはあまり研究されてこなかった。子ども(青年期)性別、学歴、階層などの視点は、心理学的な知識がどのような人々にとって親和的であるかを明らかにするうえで重要である。ホックシールド(訳 2000)によれば、感情管理は、中流階級のとりわけ女性において顕著にみられる。つまり、「こころ」の制度化は、特定の人々にとってのみ効果的である可能性がある。

そこで本報告では、中学生の対人関係を「友人」との関係性から検証することにした。平成 17 年度文部科学省委託調査「地域の教育力に関する実態調査」では、土日に過ごす相手が、小学生(41.6%)に比べて高い水準で「学年や年の同じ友人」(81.3%)となっており、中学生における対人関係の特徴は、友人関係においてみいだすことができると考えられた。中学生は、どのような友人関係を築き、その関係性をどのようにとらえているのかについて検討した。

調査対象者である中学生は「こころ」の教育やスクールカウンセラーの導入が盛んに行われて

きた世代であり、心理学的なものの見方や考え方に親和的であると推測できる。しかし、昨今では、カウンセラーの実用性に対して批判的な意見が提出され始めている。心理主義化された社会で育った彼らの対人関係や考え方を把握することは、「こころ」に関する制度を再考するためにも必要である。

(2) 結果

本調査からは、友人が多く、友人に相談をする中学生ほど悩みが少ないことが明らかになった。また、男子よりも女子の方が友人関係について不安に感じる事が多く、友人に気を使っていた。ただし、友人に相談をしない女子は、友人関係に不安を抱きつつも、友人に相談をしている女子ほど気疲れすることは少なかった。したがって、密な友人関係を形成している女子ほど高度な自己コントロールが求められていると推測できた。性別の違いによる友人関係の特徴は、以前からみられる傾向ではあるが、心理主義化された社会においては、高度な自己コントロールを期待されている女子の方が心理学的な思考や知識になじみやすい。実際、女子の方が個人還元主義的な考え方を持つ傾向がみられた。

また、中学生の友人関係について、地域や学校別に分析を加え、心理主義化との関係性について考察した。

4. 悩みと相談先

(1) 本節の問題関心

本節では、中学生の悩みとその相談先について様々な属性から検討する。

これまで中学生に関する「悩み」の問題については、筆者が管見する限り、それほど積極的に調査がおこなわれてきたわけではない。子どもの「悩み」に対して(仮に些細なものであったとしても)できるだけ早くその要因を解明し、大問題に発展する前に根絶・克服すべきであるとする臨床(医療化)の対象となっている昨今、子どもたちの「悩み」の実態はあまり解明されていないように思われる。

心理主義化を早くから批判してきた小沢(2002)によれば、心理主義は生活世界全体の

問題を「こころ」の問題として切り離して考える傾向にあり、その心理主義化の最たる形が臨床心理士などのカウンセラーの導入と普及であり、そこでは新しい人間管理がはじまっていると指摘する。

これは学校教育においても例外ではない。「スクールカウンセラー」(以下 SC)という形で/と呼ばれる「専門家」が学校に入り、学校によって名称は異なれども、「こころの相談室」などと呼ばれるカウンセリング・ルームで、子どもたちの「こころの悩み」を相談し、休み時間や放課後には子どもたちへの声かけなど、日常的な場面での相談活動を行うことが期待されるようになった。

この背景には、少年犯罪、いじめ自殺、不登校、学級崩壊など様々な子どもたちの諸問題(病理)を「こころ」の問題として捉える傾向が昨今とみに強くなっていることが挙げられよう。そうした「こころの問題」に対する処方として、SCに対する期待も高まりを見せるようになった。そうした学校・子どもをめぐる諸動向を反映するかのようになり、SCに対する国の補助予算額は増大していくことになる。「スクールカウンセラー活用事業補助」は、導入初年度の1995(平成7)年には配置校154校(小・中・高校)、予算額3億円でスタートした。以後、配置校や予算額ともに増額され、その10年後の2005(平成17)年度には派遣校10,000校、予算額も42.2億円までに増大している。わずか10年間で配置校は65倍に、予算額も14倍に増えたのである。文部省(文科省)の長い歴史においても、単独の事業がこれほど急速に拡大し、予算の増額が見られた例は過去にないという。

(2) 悩みの有無

本調査では中学生の悩みの有無に関して、①「将来の進路」、②「現在の学校での成績」、③「友達との関係」、④「先生との関係」、⑤「親子関係」の5項目について尋ねた。①②は成績や進路関連の項目として、③④⑤は人間関係に関する項目として、それぞれ分類することができるだろう。

それぞれの単純集計結果(「悩みがある」と回

答した者の割合)は、「現在の学校の成績」(60.8%)、「将来の進路」(57.2%)、「友だちとの関係」(25.6%)、「親子関係」(15.4%)、「先生との関係」(13.3%)である。中学校2年生という段階にあっては、友人・親・教師などの人間関係よりもむしろ、成績やそれに関係している進路に関する悩みを抱えているといえる。

(3) 悩みの相談相手

さらに「悩みがある」と回答した場合には、サブ・クエスチョンとして、その相談相手についても質問項目を設けた。相談相手として挙げたのは、「誰にも相談しない」、「親」、「きょうだい」、「先生」、「友だち」、「カウンセラー」、「その他」の7項目である。

参考までに、2006(平成18)年3月に実施された「低年齢少年の生活と意識に関する調査」によれば、困ったことや悩みの相談先として、カウンセラー・相談員を挙げた割合は1.2%でしかない。もともと10年前の平成7(1995)年に同調査を実施した際に、利用率わずか0.2%だったことを考えると、6倍にも増えているともいえる。確かにこれまでの研究においても、カウンセラーがほとんど利用されていないことが明らかになっている。

本研究においてもその傾向は変わらない。下表は先の質問で「悩みがある」と回答したもののうち、悩みの相談先として回答した割合(複数回答)である。いずれの悩みに関しても、順位こそ異なれども、「親」「友達」「相談せず」のが上位3項目である。

表3 悩みの相談先(複数回答・%)

	将来の進路	現在の成績	友人との関係	先生との関係	親子関係
1	親 58.3	親 41.7	友達 42.9	友達 39.0	相談せず 50.6
2	友達 30.0	相談せず 31.6	相談せず 36.1	相談せず 35.6	友達 28.6
3	相談せず 24.4	友達 28.3	親 22.1	親 26.7	親 8.9
4	先生 11.8	先生 11.4	先生 7.5	その他 7.5	きょうだい 8.9
5	きょうだい 9.4	その他 7.7	きょうだい 4.6	きょうだい 6.2	その他 6.5
6	その他 4.2	きょうだい 6.3	カウンセラー 3.9	先生 5.5	カウンセラー 3.6
7	カウンセラー 1.1	カウンセラー 1.2	その他 2.9	カウンセラー 4.8	先生 2.4
計	139.2	128.2	120.0	125.3	109.5

※「悩みあり」と答えたもののうち、悩みの相談先として回答した割合。

将来の進路に関する悩みについては、親が相談先として最も上位に挙げられているのに対し、人間関係は親子関係を除いては友人に相談する割合が最も高い。その一方、本研究が注目しているSCは、いずれの種類の悩みについても、利用率は極めて低調である。また、学校による利用度の差がないことから、SCの存在の認知や利用には学校間の格差はほとんどないといえる。

このSCの利用度の低さは何を物語るのだろうか。おそらくそれは伊藤(2005)が指摘するように、カウンセリングの何たるかを理解しないまま社会が勝手に期待を寄せてしまい、カウンセラーたちは的外れな形で時代の役割モデルへと祀り上げられてしまったことにあると考えられるだろう。

引用・参考文献

伊藤茂樹(2005)「学校教育における心理主義—批判的検討—」『駒澤大学教育学研究論集』第21号。
 森真一(2000)『自己コントロールの檻 感情マネジメント社会の現実』講談社メチエ選書。
 小沢牧子(2002)『「心の専門家」はいらない』洋泉社新書。
 A・R・ホックシールド(1983=2000 訳)『管理される心 感情が商品になるとき』世界思想社。
 保田直美(2007)「JGSS-2005にみる日本の心理主義—心理学知識と心理還元主義の擬似相関—」『日本版General Social Survey研究論文集6 JGSSで見た日本人の意識と行動』119-130頁。
 氏原寛・村山正治(1998)『今なぜスクールカウンセラーなのか』ミネルヴァ書房。
 ベネッセ総研(2001)『モノグラフ中学生 VOL.70 中学生の悩み』ベネッセコーポレーション。
 森真一(2002)「<心理主義>の時代」小沢牧子編『子どもの<心の危機>はほんとうか?』教育開発研究所。